中野区立歴史民俗資料館だより

第31号

しいのき

中野区のたからもの

名誉館長　三　隅　治　雄

当館では開設以来、区民の方々からさまざまの家財の寄贈を受けてまいりました。近年、テレビの「開運なんでも鑑定団」などの影響もあって、自分の家の古道具を見直す風潮がつよまりましたが、中野区の場合、頂戴してみて、家それぞれに年代をかけて保存してこられたりっぱなお宝がたくさんあることを痛感しました。山崎喜兵衛家・油屋山崎家のように蒐集を意欲的に行ったお家もあり、それらを集めてみると、陶磁器では、中国明代の皿の逸品から、近世初期の伊万里の水差しをはじめ幕末に至る名品のかずかずが揃い、他の衣食住や娯楽関係のものも加えて通観すると、一見素朴単調な農村地帯と思われた中野エリアが、意外に広く諸国と交流して多彩な文化を吸収して、かなり高度な生活文化を創りあげていたことが察しられます。しかも、いまは地下に埋もれた昔の家のお宝が区内の遺跡からも発掘されて、わたしたちに、古代以来のこの地の文化の歩みを語ってくれるようです。家の宝は地域の歴史遺産でもあるのです。

文化財よもやま話

お歯黒盥（たらい）

今回は区民の方からご寄贈いただいた資料の中から「お歯黒盥」を紹介します。

お歯黒は古代より行われていたと考えられていますが、盛んになったのは平安時代以降のことでした。当時は貴族社会においてみられ、女性のみならず男性も行っていたようです。『枕草子』『源氏物語』にもお歯黒についての記述があります。ここで少し考えてみたいのは、当時の明るさとの関係です。平安時代の暮らしの明るさは多分現在と比べものにならないほど暗かったと考えられます。昼間であっても今日のようにはっきりと全てが鮮明であったとはいえないと思います。まして夜にもなればほとんど手探りの状態ではなかったでしょうか。このような明るさのもとでお歯黒をした人の表情というのは、今とは違う印象だったのではないでしょうか。現代では白い歯が美しいとされていますが、かつては今とは異なった美意識があったものと思います。生活の中の明るさなどにも気をつけると、その時々の人々の生活や考えかた、感覚に近づけるように思います。

さて、お歯黒は別名黒歯（はぐろめ）・涅歯（でっし）・かね・かねつけともいいます。歯を黒く染める溶液の主成分はタンニン酸第二鉄で、鉄くずを濃い茶や米の研ぎ汁に浸して作ります。これは非常に臭かったので、江戸時代以降女性一般に広まったこの風習は、家人が起きる前の早朝に行うものとされていました。

寄贈された資料は江戸時代から明治にかけて用いられた銅製の盥です。お歯黒は日常のことなので大抵は壊れた茶碗などを盥として代用していました。それに比するとこの資料は大変高価な貴重なものであったことがわかります。

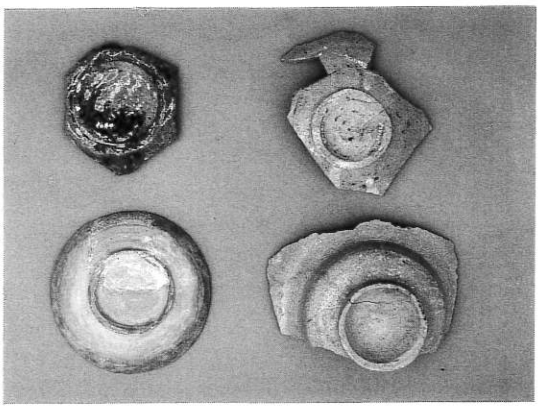
大地に眠る歴史

陶磁器・東西の呼び違い

現代、私たちは陶磁器のことを「瀬戸物」と呼びますが、これは東日本での呼び方で西日本では「唐津物」と呼ばれていることはご存じでしょうか。その理由は安土桃山時代にさかのぼります。

そのころ16世紀後半は愛知・岐阜の瀬戸美濃と佐賀の唐津周辺が陶器の二大生産地でした。折しも、信長・秀吉の時代、千利休を代表とするように茶道が隆盛を極めた頃になると、それに必要な様々な陶器がこの両地方で盛んに生産されました。

唐津焼は西日本全体に、瀬戸美濃陶器は東日本全体に、両者が近畿地方に普及しています。近畿地方でははじめは瀬戸美濃陶器が圧倒量でしたが16世紀末から唐津焼に逆転されます。



▲御嶽遺跡出土の唐津焼

17世紀初頭に肥前有田で磁器生産が成功し、出荷港の名をとった伊万里焼（有田焼）が出現します。以来今日まで、伊万里焼がわが国の日常の茶碗の主流となり、いつしか「瀬戸物」「唐津物」と言うと、この伊万里焼を指すのが、暗黙の習慣になってしまいました。日常の器がほとんど、伊万里焼（有田焼）になってしまったのにかかわらず、なぜ、その呼称が定着せず「瀬戸物」「唐津物」と呼ばれ続けたのでしょうか。それは、前代、安土桃山時代に、この二種の焼物が、人々の生活の中に強烈な印象を残したからでしょう。だからこそ、新興の伊万里焼を超えて、旧来の呼称が、400年に渡って継承されてきたのです。

日常用語の中にも深い伝統性がある一例です。

古文書つづり

無理と反動・その苦労

前回は水不足の窮状を訴える下書文書を扱いました。その続きを読んでみましょう。

文面全体の内容は、水不足の状況と水路の必要性を述べ、年貢と開削費用について配慮するように代官へ願出たものです。そのなかに前回でも取上げましたような窮状を述べる部分も繰返しでてきます。ここでふと気になりましたのは、なぜそうした窮状に至ってしまったのかという点です。

今回挙げました部分にもでてきますが、文書では旱魃（かんばつ）が原因だとしています。そこでいくつかの資料にあたって調べてみましたが、この文書の作成時期はとくにひどい旱魃が続いていたわけでもなさそうです。そうしますとちょっとした日照りですぐに農業用水不足になる環境であったということになります。簡単に水不足になってしまう田ができた、その理由は何でしょうか。

一つには地理上の原因が考えられます。中野区は武蔵野丘陵にかかり、一部には細い谷のような地形を形成しているため水の確保に向かない地域もあったことが制約になった点です。それにくわえて大都市江戸の近郊であったため、早い時期に開発・利用しやすい所はある程度開発しつくし、それ以降は何らかの無理をしながらの開発となったことも一因でしょう。この文書で問題になっている田の場合はその無理が水不足という結果につながったものと考えられます。

▲1・7・12行に、照続・困窮・旱魃などの文字

一つの無理が新たな苦労をまねいた事例ですが、他の史料から最終的には用水路開削がうまくいったことがわかり、当時の人々の喜びの声が聞えてくるような気がすることが救いでしょうか。

エジソンの蓄音機

今年は、エジソン（1847～1931）が蓄音機を発明してから120年になります。

蓄音機という言葉や機械は、音響機器の進歩とともに遠い過去のものになりましたが、幸い、資料館にはエジソンの会社で作られた二つの機械が寄贈されており、昔をしのぶことができます。

①の機械

名称　エジソン ビジネス フォノグラフ
EDISON BUSINESS PHONOGRAPH

用途　事務用録音再生機

☆　1905年に、この機械が最初に発売されました。製造番号25375のこの機械は、モーター付きですからとても珍しいものだと思います。

②の機械

名称　エジソン シェービング マシン
EDISON SHAVING MACHINE

◀①

▼②

用途　①の機械に使った蝋管（録音するシリンダー）の表面を平らに削り直す。

☆　1906年発売。製造番号6828のこの機械を見たとき、用途が全く分かりませんでした。

◎二つの機械を、十月いっぱい一階ロビーに展示します。ご覧いただいて、機械の不思議さを味わってください。

事業報告

各種事業経過

1997年7月～9月

事業名	内容	期間
企画展	館蔵品展「不思議な道具たち」	7/18～8/31
歴史講座	鉄道で語る近代史	
	「遺跡にみる汐留駅」講師：西澤　明氏（東京都埋蔵文化財センター）	7/5
	「郊外電車の発達と都市の変化」講師：益井茂夫氏（鉄道史学会会員）	7/12
	「地下鉄の歴史と中野」講師：種村直樹氏（レイルウェイライター）	7/19
	「中野の交通史」講師：益井茂夫氏（鉄道史学会会員）	7/26
文化財調査	新井・上高田地区民俗調査	継続中
埋蔵文化財調査	御嶽遺跡第二次調査報告書刊行作業	継続中
	旧国立療養所中野病院跡地遺跡調査	継続中
	東中野二丁目民有地立会調査	5/7
	江古田二丁目民有地立会調査	5/9
	本町四丁目民有地確認調査	5/29
	松が丘二丁目民有地立会調査	6/12
	鷺宮四丁目民有地立会調査	6/21
	哲学堂公園立会調査	6/25
	新井四丁目民有地立会調査	6/27
	南台三丁目民有地確認調査	6/27
	南台二丁目民有地立会調査	7/16
	中央一丁目民有地確認調査	7/19
	南台三丁目民有地確認調査	8/2
その他	学芸員実習　8名	7/29～8/10
	郷土学習相談室	8/19～8/22

寄贈資料一覧

1996年11月20日～1997年3月12日
敬称略・受入順

資料名	点数	氏名
熊手	1	佐久間　寛
浮世絵など	157	池田　久男
羽子板	7	栗原　直子
五月人形	一式	金澤　大作
浮世絵など	129	池田　久男
江戸趣味小玩具ほか	222	色部　義明
くけ台	1	辻沢　和子
浮世絵など	101	池田　久男
罹災証明書	1	荻間　幸雄

◎貴重な資料をありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

▲多数の優れた浮世絵を当館へ寄贈された鷺宮の池田久男氏(右)に対し、7/10日区長より表彰

入館状況

1997年6月～8月（延76日間）　（人）

一般	社教団体	学校教育	合計
6,721	21	0	6,742

発行年月日　1997年10月1日
編集・発行　山崎記念 中野区立歴史民俗資料館
〒165 東京都中野区江古田4－3－4
☎ 03(3319)9221　FAX 03(3319)9119
(印刷物登録番号9中教社第6号)